

資本論辭典

資本論辞典

久留間 鮫造 字 野 弘 藏
岡 崎 次 郎 大 島 清
杉 本 俊 朗 編 集

縮刷普及版



青 木 書 店

1966

資本論辞典

© 定価5000円

1966年5月1日 第1版第1刷発行

1980年2月15日 第1版第10刷発行

編集者 資本論辞典編集委員会

発行者 山 根 襄

印刷者 加 賀 美 博

発行所 株式会社 青 木 書 店

東京都千代田区神田神保町1-60

電 話 (292) 0 4 8 1 ~ 5

振 替 口 座 ・ 東 京 8 - 3 6 5 8 2

印刷 加賀美印刷株式会社 製本 黒岩大光堂
(分) 3530 (製) 4492 (出) 0015

普及版への序

日本——いや、おそらくは世界での最初の試みである《資本論辞典》が刊行されてから、5年の歳月が過ぎた。この間、《辞典》は意外にあたたかく資本論研究者や一般の読者にむかえられ好評を博したことは、編集者にとって望外の幸であった。

さて、このたび発行所の青木書店から、当編集委員会に対し、主として学生諸君を対象とした縮刷普及版を出版したいとの申出であった。われわれとしても、手ごろな廉価版が広く学生諸君や一般の研究家の手にはいることに異議はなく、ここに序を付して普及版を世に送ることとしたのである。

この《辞典》は、《資本論》における重要な諸概念を厳密に解釈し、その諸規定を明確にして《資本論》の正しい理解に役立てようとするのが主たる目的である。いたずらに〈難解の書——資本論〉の門前に立って嘆声をもらすよりは、この《辞典》を道しるべとして学問のけわしい山道をたゆまずのぼられんことを、学生諸君はもとより一般の読者に要望したい。

1966年4月

資本論辞典編集委員会

序

この辞典は、《資本論》における経済学上の概念規定を明確にすることを主たる目的としている。

いうまでもなく、《資本論》は経済学の偉大な古典であり、それが書かれた当時はもとより、その公刊後ほぼ百年を経た今日でも、つねに変らざる科学的真理の宝庫をなしている。いやしくも経済学を学び、現代社会の経済的構造を理解しようと思うほどの者なら、《資本論》を無視してその研究を正しく導びくことはできないし、また《資本論》の内容を正確に把握することなしに、その研究成果を発展せしめることも不可能である。

《資本論》はその公刊後今日まで、世界のいたるところにおいて、ますます多くの読者をえており、今後ともそれはつづくであろう。そしてまた、《資本論》の解説書、入門書の類も数多く書かれ、《資本論》にもとづく経済理論書や現状分析論をふくめるなら、文字通り無数といって過言ではない。しかしそれらの著作の多くが果してどこまで《資本論》を正しく理解し、その理解の上に立ってマルクスの理論を発展せしめているかという点になると、大いに疑問といわねばならぬ。いわゆるマルクス経済学の陣営において理論的混乱や研究の停滞があるとすれば、その責の一端が《資本論》の軽視やその内容の誤解にあることは、改めて指摘するまでもあるまい。

たしかに《資本論》は難解の書である。それはたんに、この著作が厳密な方法論にしたがって構築された巨大な論理的体系をなしており、これを首尾一貫して統一的に把握することなしには、その真意を把握することができない、というばかり

ではない。マルクスはその論理を展開するにあたり、各種の経済的範疇・概念を固定的に定義していない。事物とその相互関連は、固定した不動のものとしてではなく、変化するもの、発展するものとしてとらえられ、したがって諸概念もまた変化し発展するものとして使用されている。たとえば〈資本〉という概念あるいは〈価値法則〉という概念を例にとってみてもわかるように、それらは《資本論》中のあるページ、ある箇所を孤立的に他との関連なしに読んだのでは、とうていその概念のふくむ真意を理解しうるものではない。それは《資本論》全巻を通して論理的形成の過程において展開されるマルクスの叙述を追ひ、前後の脈絡をつけてはじめて十分に理解されうるものである。

われわれがここに公刊する《資本論辞典》は、このような理由にもとづき、マルクスがその畢生の労作のなかに使っている諸概念の厳密な解釈、明確な規定を主たる内容としており、これによって《資本論》に関する誤解や混乱を防ごうとするものである。このようにしてわれわれは、この辞典をもって《資本論》の研究はもとより、マルクス主義的諸著作の理解にも役立たせ、さらにまたこれによって《資本論》の学問的成果を摂取し発展せしめ、あらたな研究をなす上にもなんらかの貢献をなさんものと考えたのである。

本辞典は、第一部において項目別に諸概念の規定を明確にし、第二部においては同書中に引用され、批判の対象とされている学者・著述家に関するマルクスの記述を整理・解説し、第三部において《資本論》の構成および成立史を概説し、《資本論》に関する年表を付し、ついで同書中に引用されている各種の故事・諺の類を解説し、また内外各版の異同について考証した。第四部索引は和独両語によって全巻を通じて事項と人

名を検索する便宜をはかるために作成された。

われわれがこの辞典の編集を計画してからすでに五年に余る歳月が経過した。この仕事はその性質上からいって異常な困難の伴なうことは、最初から当然に予想された。事実、それはしばしば大きな困難に達着した。しかし、執筆者諸氏の熱心な協力と出版社青木書店の犠牲的援助とによって、ここにようやくその目的を達し、《資本論辞典》が世に出る日を迎えるにいたった。われわれはこの成果を決して完全なものとは自負するものではないし、またこれによって読者の期待が十分に満たされるものと敢えて広言するものでもない。いまはただこの辞典が少しでもひろく利用され、経済学の研究とその発展になにほどこかの貢献をなしうることをひそかに期待し、かつ希望するばかりである。

最後にわれわれの無理な要求や注文に応じて執筆に協力された多数の執筆者、ならびに編集の遅延にかかわらず、つねに大きな援助を与えられた青木書店の諸君に厚く御礼を申し上げる次第である。

1961 年1月 31 日

資本論辞典編集委員会

久 留 間 鮫 造

宇 野 弘 蔵

岡 崎 次 郎

大 島 清

杉 本 俊 朗

執筆 者 一 覧

(アルファベット順)

遊 部 久 蔵	(慶 応 大 学)	馬 場 克 三	(九 州 大 学)
遠 藤 湘 吉	(東 京 大 学)	藤 塚 知 義	(武 蔵 大 学)
麓 健 一	(中 央 大 学)	舟 橋 尚 道	(法 政 大 学)
原 薰	(法 政 大 学)	原 田 三 郎	(東 北 大 学)
秦 玄 龍	(埼 玉 大 学)	羽 鳥 卓 也	(福 島 大 学)
裕 正 夫	(大 阪 市 立 大 学)	日 高 普	(法 政 大 学)
飯 田 貫 一	(法 政 大 学)	飯 田 繁	(大 阪 市 立 大 学)
石 垣 博 美	(北 海 道 大 学)	鎌 田 正 三	(北 海 道 大 学)
川 合 一 郎	(大 阪 市 立 大 学)	木 下 悦 二	(九 州 大 学)
小 林 昇	(立 教 大 学)	久 保 芳 和	(関 西 学 院 大 学)
久 留 間 鮫 造	(法 政 大 学)	松 川 七 郎	(一 橋 大 学)
松 村 一 人	(法 政 大 学)	真 実 一 男	(大 阪 市 立 大 学)
南 克 巳	(神 奈 川 大 学)	三 宅 義 夫	(立 教 大 学)
村 上 保 男	(埼 玉 大 学)	長 坂 聰	(東 京 教 育 大 学)
中 西 市 郎	(大 阪 市 立 大 学)	中 野 正	(法 政 大 学)
尾 形 憲	(法 政 大 学)	岡 茂 男	(武 蔵 大 学)
岡 橋 保	(九 州 大 学)	岡 崎 次 郎	(法 政 大 学)
岡 崎 三 郎	(社 会 主 義 協 会)	小 野 朝 男	(和 歌 山 大 学)
大 野 精 三 郎	(一 橋 大 学)	大 島 清	(法 政 大 学)
大 島 清	(東 京 教 育 大 学)	大 谷 瑞 郎	(武 蔵 大 学)
大 内 力	(東 京 大 学)	齋 藤 晴 造	(東 北 大 学)
坂 田 太 郎	(一 橋 大 学)	新 沢 嘉 芽 統	(東 京 大 学)
副 島 種 典	(愛 知 大 学)	末 永 茂 喜	(東 北 大 学)
杉 本 俊 朗	(横 浜 国 立 大 学)	杉 山 忠 平	(静 岡 大 学)
鈴 木 鴻 一 郎	(東 京 大 学)	高 木 幸 二 郎	(九 州 大 学)
高 木 暢 哉	(九 州 大 学)	武 田 隆 夫	(東 京 大 学)
竹 村 脩 一	(大 分 大 学)	玉 城 肇	(愛 知 大 学)

玉野井芳郎	(東京大学)	種瀬 茂	(一橋大学)
戸原四郎	(東京大学)	時永 淑	(法政大学)
富塚良三	(中央大学)	津田内匠	(一橋大学)
都留大治郎	(九州大学)	氏原正治郎	(東京大学)
宇野弘藏	(法政大学)	渡辺佐平	(法政大学)
山本二三丸	(立教大学)	山内一男	(法政大学)
山崎八郎	(早稲田大学)	山崎春成	(大阪市立大学)

凡 例

I 項 目

項目の排列は表音式仮名五十音順による。

(a) 事項目

- 1) 同一概念で訳語が青木文庫版（長谷部文雄訳）と岩波文庫版（向坂逸郎訳）とで相違があるばあい、編集委員会の判断でいずれかの訳語を採用し、ばあいによっては委員会が独自に訳語をきめた。ただし、両文庫の訳語で表音が異なり、排列上離れているものは〈見よ項目〉（→）として、索出の便宜をはかった。

例：擬制資本 → 仮空資本

退蔵貨幣 → 蓄蔵貨幣

- 2) 相互に密接な関連のある対称的な概念は、複合的な一項目としてまとめ、一方は〈見よ項目〉とした。

例：不変資本と可変資本

可変資本 → 不変資本と可変資本

簡単労働と複雑労働

複雑労働 → 簡単労働と複雑労働

- 3) 独立項目とせず他の項目中で説明した方が適当な概念は、〈見よ項目〉とした。

例：資本物神 → 物神性

価値規定 → 価値法則

(b) 人名項目

- 1) 人名は《資本論》、《剰余価値学説史》、《経済学批判》等で、マルクスが批判の対象とした人物、自己の学説の先行者として挙げた人物、歴史的事実や事情などの資料提供者等であり、マルクスの批判等は、かならずしも当該人物の学説全体にわたるものではない。そこで人名項目では必要なぎりぎりの経歴・活動・立場を説明し、重点はマルクスによる評価に置いた。

- 2) 項目はセカンド・ネーム（姓）で出し、同一姓の項目があるばあいは、クリスチャン・ネームを付した。

生歿年の確定できぬばあいは、c. (circa の略 [頃]) を付し、両説あるときは斜線 / を付し（例：c. 1680/90）、歿年のみ確定できるときはクロス (†) であらわし、生歿年とも不明で活動した期間のわかるばあいは、fl. (flourished の略) をつけた。

Ⅰ 本文

- 1) 現代仮名づかいにより、漢字は原則として当用漢字・新字体を用いた。
- 2) 引用符は「……」を用い、独立項目となっている概念またはこれに準ずる重要なものは〈 〉でかこった。書名は《 》で示した。
- 3) その項目に全体として関連があり、参照すべき項目は、各項末に一を付して掲げた。本文中の一部の叙述に関連して参照すべき項目は、本文中に同じく一で示した。

Ⅱ 文献

- 1) 各項目についてその出所をあきらかにするため、項末に〔原典〕を掲げた。その項目が例えば《資本論》のある篇や章全体によるばあいには、篇章を掲げるに止めたが、そのうちの一部にかかわるときは当該ページを示した。
- 2) 文献名の略称および使用した版本はつぎの通りである。

《資本論》

Kであらわし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲはそれぞれ第一巻、第二巻、第三巻を示す。ドイツ語原典は Institut 版および Dietz 版（ページ建は同一）、邦訳は青木文庫版、岩波文庫版（第一分冊は第18刷以後の改訳版を使用した）を用い、ページのまえの数字は分冊を示す。両文庫の各分冊ないし青木版単行書との照応関係については、第三部の《総目次》（593 ページ）を参照。

《剰余価値学説史》

MW であらわし、ドイツ語原典はⅠ、Ⅱは Dietz 版を用いたが、Ⅲは Dietz 版が未刊なので、Kautsky 版を用いた。邦訳はⅠについては青木文庫版を掲げ、Ⅱは Dietz 版による邦訳未刊のため、黄土社版（Ⅱ1、Ⅱ2 の二冊）ないし国民文庫版を掲げ、Ⅲは改造社版全集第11巻を掲げた。

《経済学批判》

Kr であらわし、ドイツ語原典は《Bücherei des Marxismus-Leninismus》, Bd. 15 の Dietz 版（1947）を用い、邦訳は岩波文庫、国民文庫、大月書店版マルクス・エンゲルス選集補巻 3、青木文庫を掲げた。新潮社版マルクス・エンゲルス選集第 7 巻の新訳は校正が進行中のため、掲げることができなかった。

《経済学批判要綱》

Gr であらわしたが、Grundrisse としたところもある。原本は Dietz 版、邦訳は大月版第 1 分冊、第 2 分冊および選集第 9 巻を用いた。

《哲学の貧困》

Misère であらわし、フランス語原典は Editions sociales 版（1947）を用い、ドイ

ツ語版序文については《Bücherei des Marxismus-Leninismus》, Bd. 2 の Dietz 版 (1947) を用いた。邦訳は岩波文庫、国民文庫および大月版全集第 4 巻を掲げた。

《反デューリング論》

AD であらわし、ドイツ語原典は《Bücherei des Marxismus-Leninismus》, Bd. 3 の Dietz 版 (1948) を用い、邦訳は国民文庫版、大月版選集第 14 巻を掲げた。

《賃労働と資本》

LK であらわし、ドイツ語原典は《Kleine Bücherei des Marxismus-Leninismus》中の Dietz 版を用い、邦訳は国民文庫、岩波文庫を掲げた。

その他《Briefe über „Das Kapital“》, 《Manifest》, 《Lohn, Preis und Profit》, 《Formen, die den kapitalistischen Produktion vorhergehen》等のドイツ語原典は、現在入手可能な Dietz 版を用い、邦訳のうち岩波、国民、青木はそれぞれの文庫版を、大月版、岩波版とあるは単行書を示す。

IV 索引については、索引凡例を参照のこと。

内 容 目 次

普及版への序

序	I
執筆者一覧	IV
凡 例	VI
事項目目次	X
人名項目目次	XII
第一部 事 項 目	1
第二部 人 名 項 目	467
第三部	591
《資本論》総目次	593
《資本論》の構成	605
《資本論》の成立史	633
《資本論》年表	645
《資本論》引用故事解説	668
《資本論》各国語版解説	
ドイツ語版	679
フランス語版	698
英語版	707
ロシア語版	715
日本語版	719
索 引	731
I 事 項 索 引	
和文事項索引	733
欧文事項索引	751
II 人 名 索 引	
和文人名索引	761
欧文人名索引	764
編集者あとがき	767

事項目目次

イ

異種のマニフアクチャ	3
一般的商品	3
一般の生産価格 → 市場生産価格	3
一般的な価値形態	3
一般的な支払手段	4
一般的な等価形態 → 一般的な価値形態；等価形態	4
一般的分業	4
一般的利子率 → 利子率	5
一般的利潤率 → 平均利潤率	5

ウ

V+Mのドグマ → 収 入	5
運輸費	5
運輸労働 → 運輸費	6

カ

回転(資本の)	6
回転期間(資本の)	7
回転循環(前貸資本の)	8
価 格	8
価格形態	9
価格の尺度 → 価格の度量標準	10
価格の度量標準	10
仮空資本	11
拡大再生産	14
貸付資本	15
過少消費	16
過剰生産	17
過剰蓄積	19
過多(資本の)	20
価 値	21
価値革命	25
価値関係	25
価値規定 → 価値法則	26
価値形成過程 → 価値増殖過程	26
価値形態	26
価値減少〔減価〕	35
価値構成(資本の) → 有機的構成	38
価値実体 → 価 値	38
価値尺度	38

価値章標	40
価値生産物	40
価値増殖	41
価値増殖過程	42
価値存在	43
価値対象性	43
価値等式	44
価値表現 → 価値形態	45
価値物	45
価値変動と価格運動	46
価値法則	48
価値法則(社会主義社会における)	53
家内労働	54
株式会社	54
貨 幣	55
貨幣恐慌	58
貨幣形態	62
貨幣材料の再生産	62
貨幣資本	63
貨幣資本家	64
貨幣資本の循環	65
貨幣商品	66
貨幣商品の特殊な相対的価値形態	67
貨幣信用(本来の)	68
貨幣退蔵 → 蓄蔵貨幣	69
貨幣蓄積	69
貨幣蓄蔵 → 蓄蔵貨幣	69
貨幣地代	69
貨幣としての貨幣	69
貨幣取扱資本	71
貨幣の価格	72
貨幣の還流	73
貨幣の尺度 → 価格の度量標準	78
貨幣の使用価値	78
貨幣の度量標準 → 価格の度量標準	79
貨幣の前貸と資本の前貸	79
貨幣の流通	81
貨幣物神 → 物神性	82
貨幣変造(鈔貨変造)	82
貨幣名	83
貨幣流通の諸法則 → 流通手段〔貨幣の量〕	83
貨幣流通の速度	83

可変資本 → 不変資本と可変資本	84
可変資本の回転	84
空資本 → 仮空資本	85
為替相場	85
簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態	86
簡単労働と複雑労働	87
監督賃銀	88
監督労働	88
観念的貨幣	89
管理賃銀 → 監督賃銀	89

キ

機械	90
機械体系	92
機械の価値移転(生産物への)	92
機械の生産性	92
企業者利得	93
貴金属(貨幣商品としての)	94
技術的構成(資本の)	95
擬制資本 → 仮空資本	95
機能資本家	95
窮乏化	95
協業	96
恐慌	97
競争	108
虚偽の社会的価値	112
銀行券	113
銀行資本	118
銀行信用	119
銀行説[銀行主義]	121
金章標	122
近代植民説	123
近代的家内労働	123
近代的経済学	124
近代的賦役制 → 賦役労働	124
近代的マニユファクチャ	124
金の市場価格	124
金の鋳造価格	125
金の流出入	126

ク

空費	127
苦汗制度	128
具体的有用的労働	128

ケ

経済外的強制	129
経済的構造(社会の)	130
経済的豊度(土地の) → 自然的豊度	130
経済的利用	130
計算貨幣	131
結合マニユファクチャ	132
減価 → 価値減少	132
原始共同体	132
現実資本と貨幣資本	133
現実的蓄積	136
原始的蓄積 → 本源的蓄積	136
建築地地代	136
現物地代 → 生産物地代	136
原料	136

コ

交換価値	137
交換過程	138
交換手段	142
鉱山地代	144
工場	144
工場手工業 → マニユファクチャ	145
工場手工業時代 → マニユファクチャ時代	145
工場内分業	145
購買[商品の第二変態] → 商品の変態	145
購買手段	146
高利資本	146
国債制度	147
国内市場	148
国富と民富	149
国民收入[国民所得] → 収入	149
個人資本 → 社会資本と私的資本	149
個数賃銀 → 出来高賃銀	149
国家	149
国家紙幣 → 紙幣	151
固定資本と流動資本	151
古典派経済学	152
個別的価値と社会的価値	154
個別生産価格 → 市場生産価格	155
個別分業	155

サ

在庫	155
最終一時間説	156
再生産	157
再生産表式	158

最劣等地の差額地代……………	162
差額地代……………	164
差額地代の第一形態……………	166
差額地代の第二形態……………	167
産業革命……………	169
産業資本……………	170
産業循環……………	172
産業予備軍 → 相対的過剰人口……………	174
産業利潤……………	174
三位一体的定式……………	174

シ

自営農民……………	176
時間賃銀……………	178
市場価格……………	179
市場価値……………	179
自乗された労働 → 強められた労働……………	182
市場生産価格……………	182
市場利子率……………	183
自然的豊度(土地の)……………	183
自然発生の生産性(労働の)……………	184
自然利子率……………	184
氏族所有……………	184
実質賃金……………	185
私的資本 → 社会資本と私的資本……………	185
私的所有と社会的所有……………	185
私的労働と社会的労働……………	187
自動装置……………	187
自発的および非自発的在庫形成……………	188
支払期間と支払期限……………	188
支払手段……………	188
支払労働 → 必要労働……………	190
紙幣……………	190
紙幣流通の特殊法則……………	191
資本……………	193
資本家階級……………	202
資本還元……………	203
資本機能……………	203
資本主義的協業……………	204
資本主義的私有……………	204
資本主義的取得法則……………	205
資本主義的生産過程……………	206
資本主義的生産の基本矛盾……………	206
資本主義的生産の制限と限界……………	209
資本主義的生産の無政府性……………	212
資本主義的生産様式……………	213
資本主義的蓄積の一般的法則……………	215

資本主義的地代……………	218
資本所有……………	218
資本としての貨幣 → 貨幣としての貨幣……………	219
資本の一般的定式 → 資本……………	219
資本の解放と拘束……………	219
資本の価格……………	220
資本の構成 → 有機的構成(資本の)……………	221
資本の拘束 → 資本の解放と拘束……………	221
資本の循環……………	221
資本の生産力……………	222
資本の変態……………	223
資本物神 → 物神性……………	225
社会資本と私的資本……………	225
社会的価値 → 個別的価値と社会的価値……………	225
社会的質料変換[物質代謝]……………	225
社会的使用価値……………	226
社会的所有 → 私的所有と社会的所有……………	226
社会的総資本の再生産……………	226
社会的必要労働時間……………	229
社会的物質代謝 → 社会的質料変換……………	232
社会的分業……………	232
社会的平均労働……………	233
社会的欲望……………	233
社会的労働 → 私的労働と社会的労働……………	235
借地農業者(資本家的)……………	235
借地料……………	235
収益 → 収入……………	236
収獲遞減の法則[収益遞減の法則]……………	236
重金主義……………	237
重商主義……………	238
集積と集中(資本の)……………	239
集中(資本の) → 集積と集中(資本の)……………	240
重農主義者 → フィジオクラート……………	240
自由な土地所有……………	240
収入……………	241
熟練労働者 → 不熟練労働者……………	248
需要供給の關係……………	248
純粹な流通費……………	249
準備貨幣資本 → 予備貨幣資本……………	250
準備金 → 予備金……………	250
使用価値……………	251
償却基金(固定資本の)……………	251
商業貨幣……………	252
商業恐慌……………	252
商業資本……………	253
商業上の信用……………	255
商業信用……………	255

商業利潤	257
商業労働	260
小経営	260
譲渡利潤	262
商人資本 → 商業資本	262
小農民的借地農業者	262
小農民的所有	263
小農民的農業	263
消費在庫	264
商 品	265
商品価値 → 価 値	269
商品交換	269
商品在庫	269
商品資本	270
商品資本の循環	270
商品生産	271
商品生産の所有法則	273
商品としての貨幣 → 商品としての資本	275
商品としての資本	275
商品取扱資本	276
商品の命がけの飛躍	276
商品の形態変換 → 商品の変態	277
商品の脱皮した姿	277
商品の變態〔形態變換〕	278
商品流通	278
剰余価値	280
剰余価値の年率	281
剰余価値の流通	282
剰余価値率	283
剰余価値量	286
剰余生産物	287
剰余労働	287
植栽経営	288
所 得 → 収 入	288
所有と占有	288
人口法則	290
信用・信用制度	292
信用貨幣	297
信用恐慌	299
信用章標	299
セ	
生産価格	300
生産過程	302
生産關係	302
生産期間(資本の)	303
生産在庫	304

生産資本	304
生産資本の循環	305
生産手段	306
生産的消費と個人的消費	307
生産的労働	308
生産の骨骼・筋肉系統 → 労働手段	309
生産の脈管系統 → 労働手段	309
生産費	310
生産物	310
生産物価値	311
生産物在庫	311
生産物地代	311
生産様式	312
生産要素	312
世界貨幣	313
世界市場	314
絶対地代	316
絶対的過剰生産(資本の)	317
絶対的商品	318
絶対的剰余価値	318
絶対的に譲渡されうる商品 → 流通手 段; 商品の脱皮した姿	319
節欲説	319
潜在的過剰人口	320
潜在的貨幣資本 → 潜勢的貨幣資本	320
潜在的生産資本	320
潜勢的貨幣資本	321
全体的なまたは展開された価値形態	321
全体労働者	322
占 有 → 所有と占有	322
ソ	
総回転(前貸資本の)	322
総収益と純収益 → 収 入	322
総収入と純収入 → 収 入	322
相像的価格形態	322
相対的過剰人口	324
相対的価値形態	327
相対的剰余価値	328
總地代	332
總流通期間(資本の)	332
俗流経済学	332
租税制度	333
タ	
大工業	334
大洪水前的形態(資本の)	336